



◇発行人 俳人協会北海道支部 大郷石秋
 ◇発行所 俳人協会北海道支部 事務局
 ☎005-0841
 札幌市南区石山1条2丁目4-18
 辰巳奈優美 方

◇十月六日(日) 好天に恵まれる中、秋の吟行会が札幌市の平岡樹芸センター(愛称・みどりーむ)で開催された。

札幌駅からバス乗車組二十八名と現地直行組七名の合計三十五名が駐車場に集合し、写真撮影の後、園内を吟行した。

◇平岡樹芸センターは札幌市清田区にあり、地下鉄東西線の新さっぽろ駅からバスで約二十分、大谷地駅からバスで約十分、昭和五十九年に開園し、面積は二・九ヘクタール。庭木、花卉類を楽しむことができ、日本庭園や西洋風の広場があり、オノコは約二千五百本、モミジ類も七・八百本植栽されている。

管理事務所には、緑の相談コーナー、講義室、展示室、図書コーナーなどが設けられ、樹木を中心に庭づくりに関する様々

な情報を得ることができる。

また札幌市に三ヶ所ある「都市緑化植物園」のひとつとして、市民園芸普及の役割の一端を担っている。

◇各自吟行後、句会場である管理事務所の講義室に移動し、昼食後に二句を投句。

十四時、辰巳奈優美事務局長の司会進行により句会を開始。投句締切のあと、特別選者が紹介された。

その後句稿が配布され、選句のあと、辰巳事務局長と西村榮一理事の二名による披露に入った。

参加者は三句選、五名の特別選者は六句選、うち特選一句。

採点集計後に、高得点句の発表と顕彰、特別選者特選句の顕彰が行われた。そして、五名の特別選者の講評をもって吟行会を終了した。

◇札幌、石狩、江別、北広島、小樽、岩見沢から二十四の結社・同好会所属の参加者があり、会

—— お見舞い申し上げます ——

◇台風15号および19号の被害に遭われた方々に謹んでお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。



員外の方も五名が参加。

今回、結社には加入されていないものの俳句同好会に在籍の方が高得点を得られ、特別選者賞で顕彰されるなど、裾野の広がりを予感させるものがあつた。

俳句の普及にご尽力されている指導者の皆様に感謝したい。

◇来年の秋の吟行会の予定地は、令和二年四月に誕生する白老町の「ウポポイ」(民族共生象徴空間)などが候補地に挙がっている。多くの方々の参加をお待ちしている。

(小林 道彦 記)

互選 高 点 句

影ふたつ並べ樹々にもある秋思

田中とも子

世事遠く紅葉明りの中に坐す

生出 紅南

庭園の回遊つきて秋の蝶

牧野 令子

詩語拾ふ紅葉並木のご真ん中

大郷 石秋

色鳥来風の扉をこじあけて

大内 鉄幹

庭園のどこ曲がりても秋の貌

滝谷 泰星

庭園は幾何学模様天高し

田中とも子

支へ木の朽ちては秋の日の斑

池田 北陽

吟行の紅葉回廊妣のいる

牧野 令子

迷ひ子のごとく一びき雪ぼたる

仲田美智子

棘になほ鋭き残し秋の薔薇

河原 小寒

選 者 特 選 句

大郷 石秋 選

秋澄みて凜と令和の高野槇

滝谷 泰星

滝谷 泰星 選

吟行の紅葉回廊妣のいる

牧野 令子

田湯 岬 選

迷ひ子のごとく一びき雪ぼたる

仲田美智子

生出 紅南 選

毬栗を踏まず海底歩むごと

高橋ちえ子

久保田哲子 選

紅葉の帷垂れたる風の道

小林 道彦

参 加 者 の 一 句

秋の雲白雲木に寄り添へば

和泉すみ子

水琴窟妙音今し秋気立つ

及川 澄

秋薔薇樹芸の翳に現れる

大房ひびき

教会の紅葉一気に狂ほしき

大村キヌ子

天晴な空の入口 櫨紅葉

奥野津矢子

鉄塔やもみち色初み雲ちぎれ

梶川 蓉子

一位の実小池伝ひの石だたみ

狩野 和子

果樹剪定講座に人出秋高し

川村 良子

醉芙蓉蜂の手脚を光らしぬ

久保田哲子

ありなしの風に一筋蜘蛛の糸

熊川 陽子

秋気澄む流れの底のさざれ石

桑原 清恵

庭園のひとりひとりにばつたんこ

佐藤 琴美

水底の石の光りや秋気澄む

高田 喜代

水琴窟ひびきて残る虫も無し

辰巳奈優美

白雲の郷を眺むる秋日和

田湯 岬

雨の色加へしいろや山紅葉

中森 千尋

幅広き石垣道に杜鵑草

成田 哲子

きちきちや枯山水の石白し

西田美木子

日の照りて枯山水に秋の声

西村 榮一

ひとつひとつ栗のいのちのあたたかし

藤田美和子

這松に咲きたるやうな野良人參

藤田 洋子

泉水に漂ふ色葉さざめきて

三浦 紗和

穂すすきの光を掬ふ風立てり

宮ヶ丁孝子

赤のまま竹柄杓置く水琴窟

山内 元子



風 韻 帳

★おめでとうございます。

俳人協会第五十八回全国俳句大会にて、次の方々が入選されました。

・古賀 雪江特選 花木 研二氏
 ・有馬 朗人 選 花木 研二氏
 ・大石 悦子 選 花木 研二氏
 ・岡田 日郎 選 松田 ナツ氏
 ・小澤 實 選 松田 ナツ氏
 ・仲村 青彦 選 松田 ナツ氏
 ・権 未知子 選 梅津 早苗氏

吟行会参加記

○和泉すみ子(道)

バスに乗ってみると参加者がやや少なくて淋しかった。

吟行地の平岡樹芸センターは思いのほか小さな庭園だが歩くのには楽しい空間である。個人の財を寄付された故竹澤三次郎氏には尊敬と感謝の念を抱く。また、環境応援メンバーズというボランティアが花の手入れ等をされている事も嬉しい。

樹芸センターの名前に相応しく樹種も多く、腰の高さに設えた花壇の小さな花々も、花期を終えたものを含めて可愛らしい。名札とプチ解説を読んで領き乍ら自分の記憶の危うさに愕然とする。唯一以前から懂れていて、秋空を行く雲と共に印象に残ったのが白雲木だった。

拙い二句を投句し終り、いただいたお弁当が美味しかった。句会では数々の名句に出会い、学ばせていただく事が沢山あった。俳句を作る事、更に鑑賞する事はとても難しい。

物事を確り見て、「詩語を拾う(大郷石秋さん)」ことを

もつと心掛けたい。

札幌という市街にある貴重な緑の自然を又訪ねたいと思う。この吟行会を企画運営して下さった役員の皆様の御苦労に心からの感謝と御礼を申し上げるばかりである。



○大内 鉄幹(万象・たかな)

どこまでも透き通る秋空のもと、秋の吟行会が平岡樹芸センターで行われた。快晴とはいえず、平岡はテレビ塔と同じ高さに有り肌寒さを感じるほどで、早くも紅葉が始まっていた。紅葉のトンネル、日本庭園と小流れなど、以前よりよく整備されてい

たのには驚いた。と言うのも、私の所属する句会はこの近くにある真言宗の寺で行われており、以前に樹芸センター・平岡公園湿原で吟行を行ったことを思い出したからだ。当時も木々の紅葉は素晴らしく、また様々な小鳥が木の実に群れている姿は生命の高揚を感じる一時であった。特に目白は羽が緑色で摘んでしまいたくなるほど愛らしい小鳥であり、かつ生命のエネルギーに満ちている。一位の実を一気に平らげ、四十雀、日雀などと群れながら飛び去って行く目白の姿が今でも忘れられない。

吟行会は様々な結社の方が集まる数少ない機会で、日頃結社の見慣れた句ばかりに接している者にとって、新鮮で学ぶことが多い。今後も他結社の方と俳句を語ることが出来れば幸いである。

○狩野 和子(雲の木・郭公)

秋の吟行会、今回は清田区の平岡樹芸センターでした。前日の雨も上がり絶好の吟行日和。敷地三ヘクタールの中に日本庭園、西洋庭園をはじめ皇室ゆかりの高野槇、刈込みされた三

千本のオンコの木がありました。二百メートルに及ぶノムラモミジの並木道は紅葉も始まり、青空に映えて美しく、また、春に賑わいを見せた桜並木も紅葉していました。幾種類もの躑躅、藤棚、山法師その他の樹や高山植物の数々に圧倒されました。赤くまた黒く実をつけた木々も眺めて飽きません。

せせらぎを聞きながら四阿で歩を休め、水琴窟の奏でる秋の音に耳を敲てました。

雪ぼたるや色鳥にも出会い、山盛りの句材に恵まれた中に身を置きました。

今日享受した三ヘクタールの世界の縁を大切に、との思いが心の底から湧いた感謝の一日でした。

○高田 喜代(白魚火)

初めて吟行会に参加させて頂きました。平岡樹芸センターの存在はつい一年前まで知りませんでした。今回俳人協会の吟行地になったと知り、一ヶ月位前に行ってみました。まず目をひいたのがノムラモミジ並木でした。そしてパンフレットを見て最盛期の美しさに圧倒されまし

た。吟行当日、紅葉はどの程度になっただけか楽しみでした。特に目についたのが一位の木が多かったです。すべて手入れされているのです。日本庭園、西洋庭園、桜並木等々、まるで庭の見本市のような樹芸センターでした。

吟行当日、初参加の緊張とノムラモミジに会えるドキドキで出かけて行きました。紅葉はあと一息といったところでしたが、他の結社の方の句にふれて大いに刺激を受け、勉強させて頂きました。

お世話になりました役員の皆様に感謝した秋日和の一日でした。

○田中とも子(若葉)

朝から秋晴れの吟行日和。目的の平岡樹芸センターへとバスに乗り込みました。

パンフレットには、約三千本の一位の木、種々のモミジが七、八百本植樹と記されています。その広さと管理の行き届いた庭園に圧倒されながら、句作のシャッターチャンスを求めて、日本庭園、西洋庭園、紅葉並木と巡りました。

西洋庭園に歩を止めると、一分の狂いもなく刈り込まれた一位の木や躑躅が幾何学的に並んでいました。「秋晴れ」「天高し」の季語が浮かび句帳を開きました。そして、余りにも端正に刈り込まれた樹々に影が並んでふたつあるのを見て、「影ふたつ並べ樹々にもある秋思」と作りました。吟行句に「秋思」と言う主観の強い季語を使うことに躊躇し、迷いに迷いました。が、時間切れのため推敲もせず投句。

午後の句会では、吟行の写生を如何に表現するか、皆様の佳句にふれ、「深み」「余韻」等を学ばせて頂きました。

吟行会にあたり、お世話下さいました運営担当の皆様有難うございました。

○仲田美智子(香雨)

秋の吟行会にはじめて参加してから十年が経った。

限られた時間内に、投句の二句をまとめるのは大変。傾向の違う超結社の句から、三句に選を絞るのも難しい。それは未だに変わらない。

しかし今年あたりから、以前

にない楽しさが加わった。これ何だろうと思ったりする。吟行の場合、同じものを見ているので、どんな句に出会えるか胸がときめく。これは以前からあることで、この度も、奥野津矢子さん作「秋うらら水琴窟まで百歩ほど」の句に脱帽した。皆と少し角度を変え、水琴窟へ行くまでの心の弾みを一句にさりと詠んでいる。音のことは言わずもがなである。

帰宅後、ゆつくり参加者の句稿を読み返すのも楽しい。俳句を続けて来られたことに感謝。そして、これからも外へ出掛け、俳句の仲間と繋がっていきながら幸いと思っている。

なにより、事務局の方々に礼申し上げます。



○藤田美和子(河)

秋好日。柔らかな日差しがパソコンに縛られていた背中を押してくれる。平岡樹芸センターへの吟行会は、幹事の皆さんの温かい笑顔に迎えられて始まった。

小さな手帳片手に紅葉にはまだ早い園内を一人ゆつくり歩く。多種多様な楓、珍種も多い桜、何百本ものイチイはもちろん、蔓梅擬、卯木、山法師、更紗満天星などなど、歳時記にあつて普段お目にかかれない樹々の間を先人の句を拝読しつつ散策して、「あつ」と気づけばもう投句締切のお昼。慌てて二句を投函。ああしまった、先輩の皆さんに歩を合わせ、ご教示を賜りながら句を鍛えればよかった。久々の吟行に、ベンチで栗のおちる音や水琴窟の囁きに歩みを止めていた。

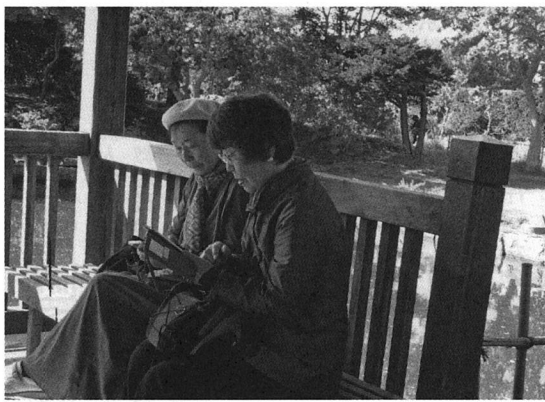
投函後は美味しい秋三昧のお弁当。続く句会では、皆さんの佳吟に瞠目した。たった半日の吟行なのに、あと一句を詠めなかつた惜しさ悔しさを抱きつつも、爽やかな外の空気に心が軽

くなりました。ありがとうございます。

○藤田 洋子(鶴)

今回の吟行地・札幌平岡樹芸センターは初めての所ですが、植物好きの私には四季折々に訪ねたい場所の一つでした。

様々な樹木や草々を楽しみながら進むと、この樹園の中心をなす野村紅葉の並木道にさしかかりました。まだ紅葉には早いかな…と少し広い空を見上げている私に、通りがかりの方が声を掛けてくれました。「素晴らしいこの並木も今年は痛々しいですよ。夏の暑さと少雨に負



けたのですね。沢山の葉が落ちました。残ったところも焦げたような紅葉になりました。例年は空が見えない程の紅葉のトンネルですのに…これも地球温暖化です」と仰しやる方とお別れしながら、私は来年の再訪を心に決めました。

作句は一向に振るいませんでしたが楽しい吟行会でした。お世話下さいました係の皆さまに心よりお礼を申し上げます。

○宮ヶ丁孝子(からたち)

晩秋の好天に恵まれた十月六日、俳人協会北海道支部の秋の吟行会が平岡樹芸センターに於て開催された。役員の皆様が当地まで足を運んで下さり、私も初参加という緊張と不安の中、現地集合させて頂いた。紅葉の始まった園内は丁寧に入られ、とても清々しかった。秋の爽やかな日差しの中を綿虫が飛び交い、水亭には水かけろうが煌めいていた。水琴窟の微かな音色、蹠から伝わる敷松葉の温もり、大きな栗の木が落とした絨の嵩、これから真赤に色づく紅葉の並木等々、沢山の句材を持ち帰り、心尽くしのお弁当を

戴きながら頭の中で整理するが、なかなか一句に仕上げる事が出来なかった。愈々待ちに待った句会が開始され、今、この瞬間を見事に表出した作品が勢揃い。自然との一体感から生まれる凛とした句姿に感銘を受けた。とても有意義な今日の学びを明日に繋げられたらと心に刻んだ。終始速やかな会の進行に御尽力頂いた役員の皆様に心より御礼申し上げます。

○三浦 紗和(白魚火)

十月六日(日)晴天に恵まれ、挨拶は「晴れて良かったね」と言う言葉から始まりました。バスには句会仲間の大村キヌ子さんと乗り、まるで子供のころの遠足に行くような気分になりました。

幹事の西田美木子さん、奥野津矢子さんを含め、白魚火は七人の参加となりました。みどりーむへは私は初めての吟行の場所でしたが、この地区に詳しい高田喜代さんに道案内してもらいました。

見所が満載で、紅葉並木は見事でしたが、盛りにはまだ日が足りないと思いました。西洋庭



園、日本庭園、水琴窟と回りまわした。そしてその美しく整えられている様に圧倒されました。この庭園の中においても中々切り取り部分がわからず、力不足を感じました。

昼食後投句をし、事務局長の辰巳さんの司会で句会が進行して行きました。参加者の投句を三句選句するのですが、本当にレベルの高い句ばかりで、読ませていただく事は勉強になりました。

今日のこの吟行会を準備してくださった幹事の皆様に感謝します。ありがとうございます。

俳句指導講座に参加して

俳人協会 第四十二回 夏季俳句指導講座

「教職員のための俳句指導の方法（中・高）」参加報告

俳人協会北海道支部事務局次長 岡澤 邦彦

今年の八月に東京の俳句文学館で行われた夏季俳句指導講座に参加してきました。俳句をどのように指導したらよいかを学ぶ教員対象の講座です。東京の気温は三十五度を超える暑さでしたが会場は冷房が効いて、全国から多くの先生方が参加した講座はとても充実していました。初心者には俳句の基本や魅力を伝えるための多くの示唆を得ることができました。以下にその内容を紹介します。

講座は、三人の俳人のご講演と二人の現役の教員の実践発表、そして参加者全員による句会などにより構成されていました。

■講演

講師

俳人 小島 健

俳人 鈴木 智子

俳人 北前かおる

■実践発表

安里 琉太

大堀 剛

一 俳句は楽しく

講座全体を通して思ったのは「俳句は楽しく」ということでした。初心者には俳句を指導するにあたって先ず大事なものは「俳句は楽しく作り、楽しく味わうものだ」ということです。あまり難しく考えないで気軽に俳句に取り組めるように導くことから始める。また、初心者の句にも必ずよいところがあるので、それを見つけて褒め、俳句への意欲を引き出すようにすることも大切だと感じました。

講師の小島健さんの、「俳句は十七音の短い詩だけれど、句を詠む人にも、その句を読む人にも、生きる力を与えることができる人生の応援歌である」という言葉が印象的でした。

二 俳句は基本が大事

初心者に向けて次に大事なものは、基本を明示することだと思

いました。俳句の基本はいろいろですが、その最初はやはり「定型、季語、切れ」でしょう。五・七・五を基本としながら、「字あまり」や「字足らず」にも触れてリズムの大切さを示すこと。また、「季語」や「切れ」の重要性を具体例によって示し、俳句の基本となる形を示すことが大切であると感じました。今回の研修では「歳時記」の使い方や、季語の本意を歳時記で確かめることの大切さも学びました。

三 実体験を基にして

俳句は実際の体験を基に作るものだということも初心者にはしっかりと伝えるべきだと思いました。講座では五感によって捉えたことを基に表現した作例が紹介されていました。

日常生活のいたるところに俳句の素材を見つけることができ、ことを示しながら、俳句の楽しさを伝えたいものだと思います。

四 名句の鑑賞

古今の名句を鑑賞することも初心者には大切であることが分

かりました。できるだけ分かりやすい句を選び、声に出して読み、それぞれの句のよさについて話し合うことで俳句への関心が高まるのではないのでしょうか。

五 句会について

今回の講座では、句会の基本的な進め方についても学ぶことができました。日頃の句会では省略していることなども丁寧に説明していただきました。そして初心者こそ句会の基本的な形を学ぶべきだとも思いました。

句会に出した句はパソコンやノートなどに整理する。また、投句した句についての参加者の評価などをメモしておき、あとで見直せるようにするなど、次につながる記録の仕方を紹介することも大事だと思いました。

六 俳句の効用

講座では講師の方々が俳句の効用についても話されていましたので、後日、私なりに俳句の効用を書き連ねてみました。

俳句は、

- 誰でも気軽に楽しめます
- 紙と鉛筆だけあればできます

● いつでも何処でも作れます
● 老化の予防になります
● 俳句によって、

● 気分転換ができます

● 学び合いができます

● 四季の美しさを味わえます

● 古今の名句に親しめます

● 日々の会話が豊かになります

● 動植物への関心が高まります

● 自然の生命力を感じ取れます

● 五感を働かすことができます

● 喜怒哀楽を文字に残せます

● 日本語のリズムを味わえます

● 生きる力が得られます

● 生きた方を見つめ直せます

● 発想力が鍛えられます

● 集中力を維持できます

● 多くの季語に親しめます

● 気持ちにゆとりが生まれます

● 暮らしにめりはりがつきます

● 俳句は何歳でも作れます

このような効用を考えに入れる
なくても俳句は続けられるので
すが、初心者への少しのきつかけ
にはなるのではないかと思います。

七 今後に向けて

今回の講座では、初心者に向
けての指導の基礎を学ぶことが
できました。しかし、指導の手順

や期間など、解決しなければな
らない新たな課題も見えてきま
した。また、初心者といつても
それまでに身に付けてきた俳句
についての知識や経験はさまざ
まです。今後は、実際の指導に
向けての課題を整理して、効果
的な指導方法につなげていきた
いと考えています。

八 新宿の寄席

俳句文学館のある大久保は、
新宿の近くなので宿泊も新宿の
ホテルにしました。駅周辺の繁
華街を歩いてみると、さすがに
たいへんな雑踏です。ガイド
ブックに末広亭が載っていたの
で行ってみました。まだ少し空
席があり、すぐに入ることがで
きました。落語、漫才、曲ゴマ、
大神楽など興味深い演目が続き
ます。しばらくぶりで腹の底か
ら笑い、言葉の持つ力に改めて
感動しました。伝統的な寄席の
芸には俳句にも通じるものがあ
ります。長い間受け継がれてき
た話芸や俳句のような文学の基
本がこれからもしっかりと受け
継がれていくことを願いながら
新宿をあとにしました。

源鬼彦顧問 第五句碑の建立—新ひだか町—

九月二十七日(金)、新ひだか
町公民館において、前支部長で
ある「道」の源鬼彦主宰の第五
句碑が建立された。

句碑の建立は、「道」の新日高
支部でもある「新ひだか」でか
り吟社」が創立七十周年を迎え
るにあたり、その記念事業の一環
として実施されたものである。

まさに天高く馬肥ゆる秋の一
日、「句碑建立除幕式」が公民館
前広場において、午前十一時半か
ら開会。ペてかり吟社の四名に
よる句碑除幕のあと、静内神社
宮司により入魂式が行われた。
式辞はペてかり吟社主幹の桑
島敏氏、その後新ひだか公民館
館長による祝辞と続き、祝電が
披露された。源主宰の謝辞で除
幕式を終了。

その後、公民館に移動し、記
念撮影の後、ペてかり吟社の「創
立七十周年記念俳句大会」と
「記念祝賀会」が行われ、参加
者全員に、道文庫句集の序文集
『続・漣漪の景』が源主宰から
贈呈された。

(小林 道彦 記)

○碑句

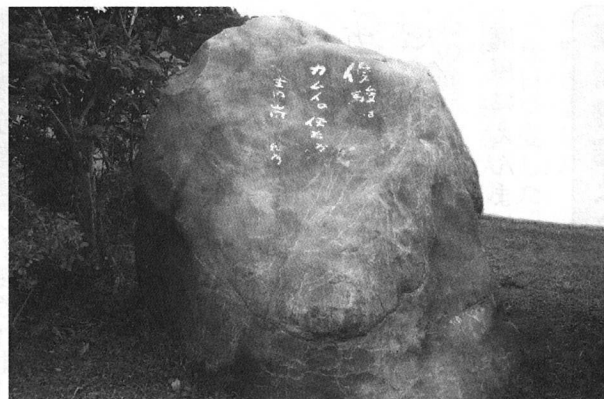
優駿はカムイの使者か青嵐

○碑文

昭和二十四年戦後の混沌とした
中で「ペてかり吟社」は生まれた。
今年創立七十周年を迎えたが、そ
れを記念して俳句雑誌「道」源鬼彦
主宰の句碑を建立する。

令和元年九月二十七日

ペてかり俳句会七十周年を
記念する会



新会員紹介

俳号 (所属結社誌)

- ① 簡単な俳句歴
- ② 自選の一句

池端 素舟 (道) 札幌

① 平成元年「ホトトギス」入会

平成三年「にれ」入会

平成七年「道」入会

平成二十一年「道」同人

② 桜桃忌一輪挿しの水吐かす

市川 節子 (白魚火) 苫小牧

① 平成二十二年「白魚火」入会

平成二十八年「白魚火」同人

② 少年のやはき掌秋澄めり

伊藤 織女 (雲の木・知音) 札幌

① 平成二十二年「知音」入会

平成二十八年「雲の木」入会

② 廃校の跡に一夜の盆櫓

片瀬 あづま (壺) 札幌

① 平成二十九年「壺」入会

平成三十年「壺」同人

② ゲリラ雨あけの新宿女郎蜘蛛

佐々木 美峰 (壺) 札幌

① 平成二十一年北見「濱」入会

平成二十二年「濱」入会

平成二十八年「壺」入会

② 母子像の母を離れぬ蜻蛉かな

澤谷 ことみ (壺) 北広島

① 平成二十七年「壺」入会

② 寒卵一音響く厨かな

中村 公春 (白魚火) 鷹栖

① 平成二十四年「白魚火」入会

平成二十七年「白魚火」同人

② 男とは死ぬまで男冬芒

宮ケ丁 孝子 (からたち) 札幌

① 平成二十一年「丹」入会

平成二十二年「丹」同人

令和元年「からたち」入会

② 北溟に星座傾げて小鳥引く

今野 律子 (道) 釧路

① 平成十九年長月会入会

平成二十一年「道」入会

② 心音の蹟きかげん風邪心地

受贈句集紹介

◇『薔薇の富貴』(さつぽろ印刷)

滝谷 泰星 (雲の木)

「雲の木俳句会」創設代表である氏の第二句集で、平成十八年から三十一年四月までの作品を収める。第一句集『苔の花』では第二十七回鮫島賞を受賞されている。「北の雲」「白露」同人としての句歴を重ね、平成二十五年「郭公」(井上康明)の創刊同人となられた。句集名は、井上主宰

選の秀句集に取り上げられた「薔薇の富貴」百万本も一本も「から名付けられたとのこと。手作りの俳誌「雲の木」の毎月の発行で多忙の氏だが、改元を機に平成の句を纏めておかなければという強い衝動にかられたの一集。流水を待つ群青の身じろがず・ものの芽のひかり一等三角点・帰雁一群朝立ちの声の張り (R1・7・1刊)

◇『赤蜻蛉』(柏櫓舎)

庭田 一美 (道)

『仲間』に次ぐ氏の第二句集。

氏は「道」幹部同人。平成二十一年より三十年までの三百句を所収。「道」主宰源鬼彦氏の帯文に「庭田一美という品格と詩情が色濃く一冊」とある。出身地宗谷への望郷、家族への思いの句、身辺の人々、また動物、虫達への温かいまなざしの句、平和を願う句、笑みさそうユーモラスな句など、氏の人間味あふれる一集となった。句集名は「母子像へまた寄り道の赤蜻蛉」より、源主宰の命名である。

乾鮭のなほも沖見る眼窩かな・ねんごろに命も洗ふ終戦日・水羊羹しあはせさうな母の愚痴 (R1・9・23刊)

川村 良子 記

合同句集

◇『花桐』(花桐俳句会)

飯川久子氏を代表とする俳句会の十二名が一人十五句を発表。第十九号。

・句碑訪へば鶯鳴けり日本海 飯川 久子

・花缺かるき音して寒明くる 青木まゆ美

・万葉の世の風薫る令和来よ 小野寺泰子

・天気図の風は矢印鳥帰る 並河 裕子

・廃屋にえんま蟋蟀日は西に 蘭 さと子

受贈俳誌より

『アカシヤ』(十一月号)

遠雷や牛舎に戻る牛の列 鹿糠寿恵女

部屋中に子の声満たし夏終る 柴田 襄子

掃除機のコードからまる酷暑かな 菅原 孝子

水澄みてひとはけの雲父送る 林 洋子

蚊帳吊りてひと塊の家族かな 天間 修子

『葦牙』(十一月号)

運河には運河の匂ひ秋暑し 伊藤 玉枝

夕風の猫が顔拭く路地灯り
葉山 彰

月光の濾過を重ねし月夜茸
田中 英夫

一陣の風によるめく羽抜け鳥
赤江橋明子

虫しぐれ旅の枕の馴染みけり
岩筋由紀子

「雲の木」(十一月号)

雪蟲のひとつを胸に忌を修す
三浦 敏子

海沿ひの町から町へ枯ドグイ
松川 悠乃

その山を妻にも告げぬ茸採り
伊藤 織女

ポンチョ着て秋日の庭の立ち話
池田 北陽

空知野の秋風よぎる観覧車
伊藤 淳雨

「樹氷」(素秋号)

背のびして窓より雨の薯の花
中村 洋子

ドクターへり点となるまで雲の峰
濱田 恵子

ひと渡りきらめく田水張られけり
久居 智子

手毬花くすくす笑ふ童子仏
秋葉 礼子

片蔭を信じ八十路の終りかな
北見 弟花

「雪嶺」(十・十一・十二月号)

はじまりは応援合戦運動会
成田恵美子

大の字の寝顔涼しき夏座敷
高野 まり

田水張る地底の命蠢めけり
藤嶋 正

点々と玫瑰咲くや廃線路
小川原紀美雄

蝦夷萱草海を恋して咲き誇る
岡本 愛子

「壺」(十一月号)

吾に残る時間のかたち吾亦紅
中村ひろむ

母だけがカラーの遺影初盆供
奥野 彰

揚げ花火終りて山の闇新た
笠井 操

見目良きは母とも思ふ茄子の馬
平松富二代

はらからの連れ立つ岬秋の虹
中村 映子

「道」(十一月号)

波音の迫り来るかに昼寝覚
北林由鬼雄

露座仏の伏し目に梅雨の長きかな
岩井 鬼童

毛虫踏み終日足裏なだめをり
金田 一波

笑はせて泣かせる子役村芝居
伊藤えみ子

道らしき一筋を来て葦の風
滝 玲子

第二十三回北海道俳人協会賞 選考委員

選考条件

① 俳人協会北海道支部会員の句集であること。

② 平成三十一年四月一日から令和二年三月三十一日までに行われたものであること。

③ 対象者は、選考委員各氏と事務局あて各一冊を送付して下さい。

★ 合同句集、遺句集及び既受賞句集は対象外となります。

※ 任期は二年（選考繰越の場合を除く）通常、毎年半数を交代

飯川 久子（鴻）

〇〇四〇〇二 札幌市厚別区

岡澤 邦彦（アカシヤ）

〇六四〇〇八 札幌市中央区南七条

熊谷佳久子（天 急）

〇六四〇〇九 札幌市中央区宮の森

高橋 千草（壺）

〇六四〇〇九 札幌市中央区宮の森

二条十三丁目十一・十二・二〇六

すずき春雪（道）

〇六二〇〇九 札幌市豊平区平岸

一条六丁目一・二・三・四

俳人協会北海道支部 第十二回俳句大会選者

石生大尾金河清高竹中大名西橋畠林源山
井澤村行原水松内郷村取本田
こう子南彦子寒子堂秋治史恵木子子子子
鬼佑典末美光英石直暮芳小康勝久紅

磯大内江波響
岡本正敏
金野歩子
狩保子
久湯子
滝谷子
辰巳子
土門子
成田子
西村子
橋本子
花間子
平木子
山形子
陽子
(三十六名 五十音順)

第12回俳句大会 作品の募集

- 募集句 雑詠 (自作未発表作品であること、
前書き・ルビは不可)
2句1組 (何組でも可)
本号同封の所定用紙をご使用ください。
(用紙のコピー可・A4版原稿用紙も可)
- 投句料 1組につき千円
(小為替又は現金書留で作品と同封のこと)
- 送り先 〒005-0841
札幌市南区石山1条2丁目4-18
辰巳奈優美 方
俳人協会北海道支部第12回俳句大会係宛
- 投句受付 令和元年10月1日(火) から
- 投句締切 令和元年12月25日(水) 当日消印有効
- 選者 俳人協会北海道支部会員各氏に依頼
- 入選発表 「北こぶし」第93号紙上(令和2年3月発行)
- 顕彰 上位入選句ならびに選者特選句
令和2年5月17日(日)の俳人協会北海道
支部第36回定時総会席上にて
- その他 明らかな誤字以外は応募原稿のとおりに
印刷します。又、類句・二重投句につい
ては入賞を取り消すことがあります。
(出句後の訂正はお断りします。)
尚、応募者全員に作品集を差し上げます。



新春句会 ご案内

- 日時 令和2年1月19日(日)
13:00より
-12:00受付開始-
- 場所 ホテル札幌ガーデンパレス
札幌市中央区北1条西6丁目
TEL 011-261-5311
- 俳句会 当日発表の席題
二題から選んで一句出句
- 顕賞等 互選高点句 選者特選句
-特別選者の講評あり-
- 交礼会 俳句会終了後
- 会費 6,000円 (句会のみの場合1,000円)
- 参加申込 「北こぶし」92号 (本号) 同封の葉書
による
- 締切 令和2年1月11日(土) 必着



事務局&編集室



◆今年の秋も、あちこちで収穫を祝うイベントが開催されました。海の幸、山の幸がところ狭しと並べられ、訪れた人達の胃袋を満たしました。

私も近くの会場に足を運んでみましたが、休日ということもあり、すれ違うのがやつとのような盛況ぶりでした。若者だけではなく高齢の人も少なくありません。肉や魚介類の焼き物の店が並んでいきます。まだ昼間なのにビールを片手に舌鼓を打っている人も大勢います。会場でのいろいろな会話や笑顔が食べ物をさらにおいしくしているようです。各地の特産品も並べられていました。値段は少し高めなのですが、会場の雰囲気も手伝って財布の紐もゆるんでいるようでした。

このようなイベントがそれぞれの地域の元氣につながってほしいと思いました。

◆今年の秋の吟行会は、平岡樹芸センターで開催。前日の雨も上がり、絶好の吟行日和となり、参加者は思い思いに吟行を楽しんだ。

昨年の胆振東部地震で被害を受けた厚真に行く機会があり、地震痕を見てきたが、山肌が抉り取られ、自然の恐ろしさを実感。道路脇にはコスモスが犠牲者を弔うように風に揺れていた。

私の住む清田区里塚も、地盤沈

下で復旧工事が進んでいるが、一日も早い復興を願うばかりである。来年の東京五輪のマラソン・競歩の札幌開催は、道民にとつて嬉しいニュースである。沿道で応援できるのを今から楽しみにしている。

店頭で漬物の材料が並び始めた。毎年百本余りの大根を干し、玄米漬け、粕漬け、鯉漬けなどを作る。漬け上がりが心配ではあるが、楽しみな冬がやってくる。

(中森 千尋)

編集後記

▽秋の吟行会は天気に恵まれ、皆様のご協力で無事終了致しました。快く吟行会参加記を寄稿して下さい。下さった方々に心から御礼申し上げます。

▽第十二回俳句大会の投句用紙を本号に再度封入致します。皆様奮ってご応募ください。会員外の方々の投句も歓迎致します。また、新年交礼会の案内葉書には、出欠の他「会員の一句(既発表句可)」をご記入の程、宜しくお願ひ申し上げます。

▽本年度は、俳人協会新会員九名の方が支部会員となりました。支部活動への積極的なご参加、ご意見をお待ちしております。

▽今年もまた災害の多い年となりました。台風の被害に遭われた方々に心からお見舞い申し上げます。これから寒い冬に向かいます。皆様どうぞ万全の備えをして、お体を大切にお過ごしください。

(陽)